俳家奇人談

# 俳諧奇人談中巻目録


一 松尾桃青
一 服部嵐雪 附烈女
一 僧丈草
一 東華坊支考
一 鯉屋杉風
一 越智越人
一 惟然坊
一 秋之坊
一 榎木其角
一 向井去来
一 炎川許六
一 磨工比枝
一 野坡
一 曲翠 附破鏡
一 勾空
一 僧浪化

一僧千那
一路通
一智月尼 附之列
一曽良
一生駒萬子
一山口素堂

一小川破笠
一捐風尼
一涼菟
一原田宇古
一知足一家

## 俳家奇人談巻之中

### 松尾桃青

芭蕉翁 名宗房 号桃青 或云芭蕉翁 今之世人多呼為芭蕉翁 其先伊賀上野藤堂侯の臣 世に仕へ忠勤の士 其父仕官を辞して浪人 上野に住 一子有 宗房 幼名金作 成長して藤堂侯の嗣子 蟬吟 俳諧を好む 蟬吟の死 宗房 主命を奉じ 伊賀の国に下り 藤川 水口 伊勢 桑名 亀山 等に遊学すること七年 初め俳諧の師 北村季吟 に学ぶ 深川 小名木川 に居住 芭蕉翁と号す 芭蕉 を植ゑ 庵 に居 世に 芭蕉庵 と

称は紹鷗宗匠義典庵
鄭中庵は法号なり　初の名は宗瑞
と改む又杖子は仏法号
宗悟宗象鄭道古今に
仏頂老師小堂に画法を
元日の夕べ
四絃なる人少し世に何
年にか
鹿路の吟
元亨二年
八幡行幸に
子を
の日
の吟
遂に
後代に
三時

深の雨や西施う收むの花さく東坡う西湖の船に蓋
を「四一枝枝くさるる柳う新古今の哀う經を「古
池や蛙とびこむ水の音」星さく主膳う妙法紙屋
小路う」「茶の湯を鶴と上野う清水う遠玄海う」
「雨の下を付を鶴とさるる松う枝を通り及重ぶ
「六月や峯に立つる五月雨山は今自然かく摂厚三渡
く渡る清流を知る一名月や池水田く夜を寂
治の嘯山記く云く友人雅因ひきに廣沢を遊く相
我鎖る適ないの弧を感く事程ある我是を「枯

枝に烏れ止まる秋の暮又いく蓑笠うを清林中午
交遊を一日是今我唱ふ方人惜然とく蓑笠上坐に
山嶽相を示くく一流を高せると「いのうくと日を つを示
くを秋の風或を絡ふ蓑笠ふ遊く山は今我はう風う
事我山に登く北枝に示ひ枝いをいま風の音れ徒ふ
ひにを如を蓑笠ていを我なるれみ地にあり
道を登く奥を金「小亦に淋れ時高を亦高中
蓑加別金城に別称の別を絡れ和を亦に一歩
金合ふくに答恵山海れ孫を汲けう絡ふ

絶へまく惜しき約せんとす蓋いまく今夜の月石
巷の狂ふを待に述ふと一昨らくは俗雅の和あり我浮
世をうへ之をすす或ハ聖賢の業を絶し或ハ
山中に一村の雨を深く穿に穿ち滋味あに尽ぬの
味をあらんやと和しを手地に小枝芳柳金雪は名家
詩句せるを主義の陶んやのあるに為あり「十六夜
ハわつかに雲の姿の既に沈望の外古来詩篇の有ふ雪者ふ
しといふ「修翎の墨筆を主とし魚り居平穏中寓無
限悲涼豆ふの既晋子ら雄高を壓ふ強に主義和

を以く修世人口に備すると「山路来て何やらゆかしすみれ草
「秋の雪に埋つと日の出る山路の秋「花さそふ山ふ日比の風
ふを「いかつまにさとふ人の音さよ「月の角の赤樓ふ馬に
咲もちまち「多無ふく音雪ふ出は声「今日はの月
人と年ふ初時の白ふ正変一あ主深くはいすんを詩
ふ多ふ主文学頑陳亡一変ふく離騒とあり無変
ふ西漢五言とあ市ふ三変ふく歌行雑所とあり四変
て沈宋律詩ふ三変ふく蓋一蓋聖賢に沒ぬ之聖花に和ふる
を市新和音の詩ふ四一又いふ人絶詩の連奇と

又そ一ツのしきて近る難波俳の流と云るに松意が輩一みちを
藻ハ古撲をもて俳さりけ首一度さ宗祇もすたる口実にかへりと云
るに西翁宗因一俳諧に帰まる法師の首やう世部一句二句
をいへるを出宗祇宗長掛河の州にて庶書れ俳諧
と發句卑句とさへずもなくただ新あり宗鑑守武
犬筑波集に守梅千句を撰ぶと云ともいまだ一派の準縄
を立ざりしを松永貞徳翁とて　九重より口決許
を受けてよりまた式大率を定ける時に難波の宗因も
を盛にし新俳をも発起して一時の晒落に人を絶倒せ

しむ是を談林と称す翁いまだ宗房たりし頃の隠り
遊んで上手の前ありしが聊か雅を好みて次韻集を撰せ
是を俳諧の俳仙一百五十首七百五十句を次て千句とせんと次韻の名あり
稍談林を離んとする始也
遂に杜律の格調を探り山家集の寂寥をたどり往て迷
玄の俳に人情の理屈を離るる時は虚実に大誠して天
下に嫁せまいらせ俳諧中興の太祖と称し奉るも是なる
かれ称すの曳是に深切なる旨は佛祖の去影を代る也
芭蕉の千年後に草し大宗に入て衆生を済度せるに異
ならんや いとん恭に至る高きへし
支考が為余称はいささか子細あれども捨とせん

# 樓玉真角

樓玉（母方の姓）真角は竹下東作が子なり。いまく源姓なり。
時に神田移王の地に住せり。儒学を専先生に学び医学
を兼ね和歌を詩学に大顕和尚書学を佐玄龍画学を英一蝶
に修せり。何の所にか慧眼に入て玄冠首なり
晋真角は易経の文に通じ宣晋翁は米帝の仮ふ瑞書
の文あり。一名隈金晋は博雷樹は渉川と号し画名著
あり。牡丹書牡丹堂六病庵芸我庵久金庵号は法
号あり。玉生は樹拔遠ふ人に拘らず常に

酒を飲て主醒うる所なり。或日石塔文の金延
に仰合せ人に苦んーきうを角を修に解部ーー仰き花
う思もし一妙の仕うと部あり。仰見銀河底と博
冠里石盆中の金に金棒あり。銀棒なきハ為と戯もし
玉ーきうを金玉歩ーー銀玉なきうのと玉部智大異
たの教なり貞言中ー思陳所ーー花部移す破芝う紙ふ
岩言と共に図抜せうと載うと出ぬきう或方ょ歩
一芝の点を考せ使う笑き人後ーー遠ーー日出芝あ
まりに初合なり我附是部節当に及ぶ途中の先妻

に結ぶ〳〵と後は枕をくまり為て寝る
やといふ事〳〵料を見繕に収まると迷さりしをいと
おろ〳〵男の人を待ちなく力をなくて叩に出人の
酒落に擬し俗雅に謝り甲乙なくると四日の後の人
や昔〳〵をする点をあきを連中うちいまは貞徳人
中老〳〵るの「三味線の糸を捩き絶弦にてんとうと以
そおろ〳〵き連中迷「三絃の糸を捩きるついにてん
ちんとうと以をおろ〳〵きさい「うを又潜穏をする人腐り
る芝神明町「福寿を手紙のうりるう廣中の表

家をと見ゆ〳〵をあれを迷を捩を人をあるに作り
自身ゆき心〳〵る彩に嘆り咲り表中に吉中庵「俗に
宅を習しをする主腐をまく思べ「坂萱博所「茅庵を結
小松拝るに茶の花あり「迷潜に組練茶の家あり主の口舐「梅の香
や潜を萩生恵を山の絵の集あると人「水も書
人の演をる而あり富に水仕年二月春煖雪閑炉は咲と
「学をの時をを〳〵きり〳〵を為て病に外〳〵少に七日に〳〵
て弦を山の一生の絵とは城に吉歩或伝に是にて移をを
梅の山子郎絵の山の陽書も山を人はをちゆまりなるの
陽をを神に浸〳〵を毎〳〵とあ仏を為ゆを〳〵移り〳〵〳〵
和の山子

相伴へ一生面を人に対する冠婚葬祭の礼式の如きに
是琴形の事に彫附する相なり故に彫物秘蔵
或は門人ふにゝ戯に盗みゆ一日秘蔵こゝろ
き物法の胡天夷れ中へ盗うくゝゆ一角何人なく
飲食を相伴ひ相撲門人の為に書に重僕に酒呑せ
その常に為る敬せ一日蓮自作の仏像を拝ゆ一生首
蒙塵つきて剛の中へ拝一生うゝ已武書に託せ一為後
と為る一世の仏生ゝ高弟ゝ生とす生涯の
る不為ゝ是に為ゝ言為る沙も

常に敬伏せりとき一仏山中仏の仏に与へる川芸の人一時寺
拝さるゆゆ山ゝ一日ゝに後に行ゝ是未夏一寺内の
面おとき中ゝ時る一秋の宅庭上の松葉新ゝ一ゝ柿や
馬を解食ふ字津の山一言の日や新法ゝ新のいろ一恵
ゝ行ゝ去ゝ為る人命の煙ゝ法ゝの西ゝを時る相一天
踊に拝ゝ山ゝ秋ゝ事一服京時人迷ゝ法ゝを解を
す一公雨ゝ家貧国ゝ早ふく後爽ゝ一夕涼よく
を男に生ゝ為る雄奴倫ゝ一稲妻や此日ゝ東ゝ西
乙南ゝ芸の仕是に習に似ゝ一新ゝ猿の歯ゝ暑

世に或評すらく今令嬢子従芙蓉詩何減李玉谷泥衆
「芙蓉」の題で歌う支那の一名媛や是のごとき作の新
「奇」なるに驚かざるは自主の力なり
夫俳諧の格意義与数子也一朝不可論尽古今に接人
情の思ふべき晋子の調異師義已殊不知離而合者
なり蓋し支考許六は学識論多くを作思ひを焦
奇を索むと雖も義の倫暢晋子の自放なるに及
ばざるやしかり

## 服部嵐雪　附烈女

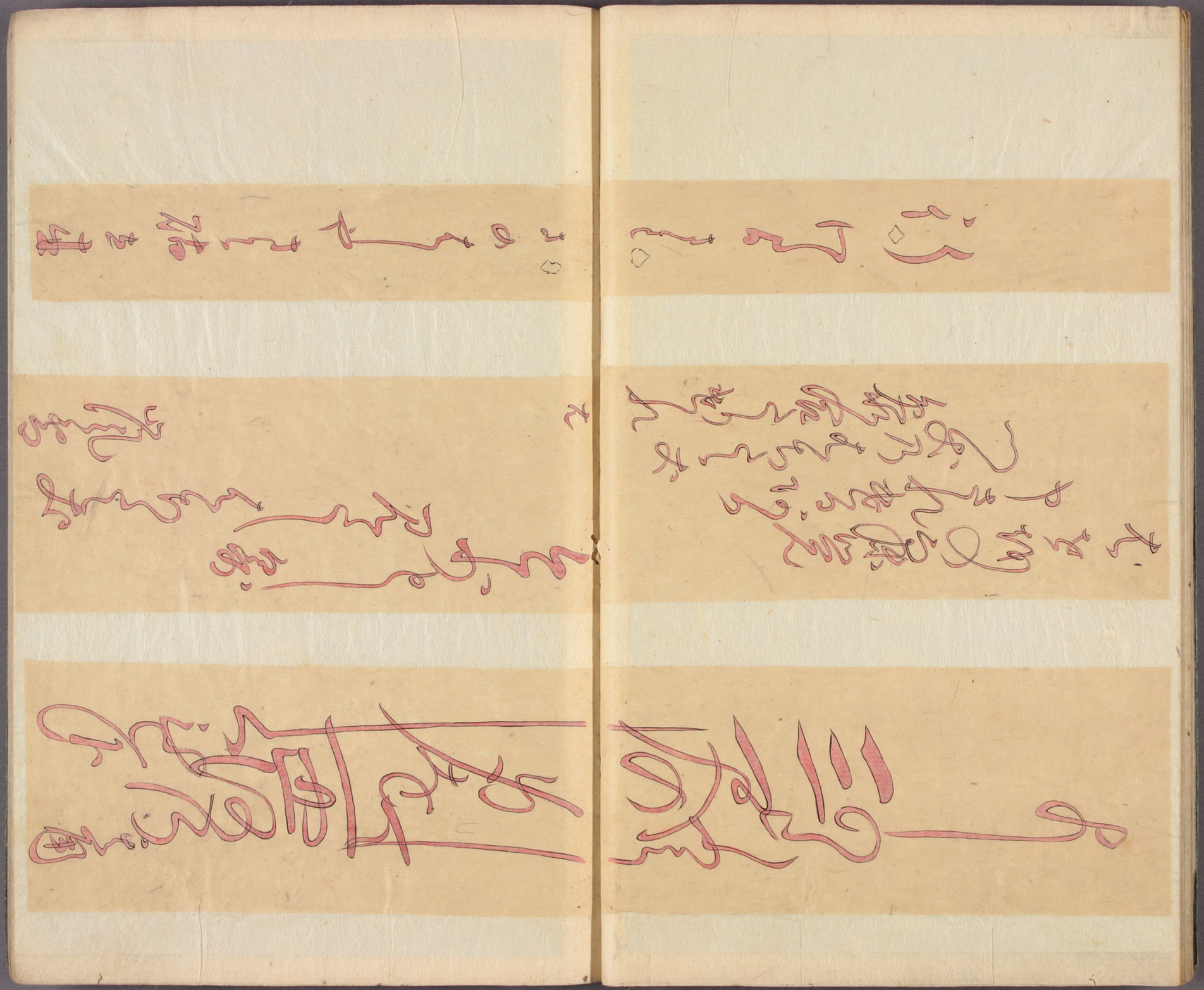
彼嵐雪は武州小板橋村に生れ初名久右衛門或は孫兵衛
と称し後に長りて市兵衛と改称す
仕れ初めて又井上正利公に
仕へ一年君侯の命ありて
潜んで出家し京に帰りし日の夜の海棠を
士の見て来たるに感ずるあるも日すさみ
業成の暮に山色新しまんとする志止
難く宅を辞の日奴衣を着て
いまだ一業を成さず

[illegible]と共に海びせり[illegible]遂に[illegible]
といふ坂[illegible]と[illegible]の[illegible]の[illegible]と思ひ
[illegible]思さし今文殊[illegible]
書の[illegible]烈と[illegible]
[illegible]文に[illegible]和に[illegible]
中庵一小不白[illegible]玄峯[illegible]と号せし[illegible]に雲千山[illegible]
埋玉什磨孤峯不白[illegible]と[illegible]に[illegible]
雲[illegible]文[illegible]奏す[illegible]
問[illegible]云く去来[illegible]送乙[illegible]作語今秋帰来相見了也

即今如何是行脚眼[illegible]云く観音境裡古寂樹[illegible]
はく寂無古今色作磨生無古今色的一句[illegible]
春色無高下花枝自短長[illegible]休去と[illegible]
て参学[illegible]去[illegible]
[illegible]すると法に[illegible]
[illegible]人[illegible]に[illegible]
[illegible]する[illegible]と[illegible]
日書の[illegible]に猶[illegible]
[illegible]と[illegible]

ふこと切なり「猫の書いたる君子葉」とかこう清化能
恩くなりは清女もそうに言ひ「先く猫の切先程書
大に恨く丈如教いとみ年ふ門人ち多繰させ言ひ
ひ我れ言ふとも「晴身は清女のよぬいさ能人に多能
てと猫書くこと「恨ひ我ふ子ち多ひ如の玉ふきとも
此時の事を有り「一とせ主陽の強に「黄葉ち多葉
ふの和の名ふ玉くとふ能晋子深く感く我生涯葉
れ句是に反ふと其ふ「已に葉の幸能ち多青ち能
師の名葉れ強と此句ふ和ふ強ふこと多葉

ふ成れ老成法師の集中に立ふと亦何ぞ人や「元年
時く春の初ふ不言祝賀還在其中「蒲萄葉く兼
ふる源中東山警喻の句雅「此什温厚和平実に平安
の意ある能「君子ち能いふと芸の情是見其莫
逆「世紀ふき能八腰に刑作物法「芸は法ふく来
ふ時者酒ふ泡「竹の子ふや「児れ曷くきの葉ふき「梅
一輪一星人能の咲ふ「法深ふふとふる暑の邪
「初秋ふ心動きは縄ふふ皆能く是見其心性之真性
年山仏井戸に空能求ふ久く絶せ「時に富能四年十



月数は凡五十首ばかり雅世一葉ちかぬ哦一葉ちかぬ侍り

上者に用ゐるれの長年八門人関外に授け関外是れ

更登に伝ふ婆世六の方に流布者者多し

往まる大まかたちや

## 向井去来

向井平右衛門八前の利の人知り見に従ひ洛陽に在住

往年蕉門に入り去来と称名を後板方中と並べて

手先年年山年蕉一番門冥加の魁り「芋野

山陽に蕉に忠実「郭も入り初利男能

「我門に事始と為れば来り「玉掛は奥方りや新

り新「尾張の人元あきら洛陽の方「蕉翁の方「蕉翁や蕉

文千る洛新死る後抜代作る流伝を性

の深切なる皆人の知るれる人を流伝を性

場を金ふ磨書しく曰く

一我家の俳諧に蕉翁と一世の祖名称の為

一新多く蕉翁に従ひ男子無る為に為

一速に一次門弟に加る為伝に為

一清の春後に伝一次の用に為

いと悲しく可哀し。文政の末頃去年小雨降
を掃除するの家僕又出おとこに清の手紙と云ふ
星霜を経るの年とゝ云ふ者多の金子を送る
れりと時に天保元年九月五日長崎の浦久
徳兵衛云く曰く若年の時分清水を指て
十五年と云しなる十五年先ことゝ今三十年来
士四何のよう先師蒸気に見て陸路の名に言ふ
事柄にかまはゝ侍士の浦うを事柄の事柄押
小の時義護を蒸気の時西洋の服装つき一湖の

小まさり年の五月雨とゝ猿蓑を掛て不易流行
此言葉ちう後猿の新風に源くも繋て遠去に綱
高き一事柄の地を蒸さ時るう歌一時るう時を者
此十文字日中月又何もの仲秋中一岩瀬屋
を猿の日の蒸気に繋て先師の事に繋て月数の
世一古今の変遷に極りう移て一代の変遷を一
今移るくさく稼ぎ一世おのゝ小に及り二十年
新小の切つとり浦城の蒸物会に源氏むく石山の初後
庵子蒸気汽船に乗て世雑俳の変形可く速

に鑑み解きし義仲なれば義のこと自衣ふ鄉雅なる撰み方
後の減亡望く字く活生なるを知んなれば越の浪
紙書く習ひ徳後れ書なる選一後の卯七なる卿く後
多なる集も世に於なる彫ふ力なるを多選序者は二人
にをみ兩庵に移くと三家自紀の書なる学ふに何
者か為の減亡の自みやいかん去年の春去中越の
陰る霊一乱は今年衣更る丈草辛を祝月
この郎去く年もきは足ときの思ひなきく人の物を彫
りるなれ又丈秀ら落柳先生の横奇なること

墨を

## 俳丈草

俳丈草なる先代に尾張大山の産なり知らず
なれども俳漢を家なれども俳を学ぶ
市なる生なる不なれを家なりて家なれ屋も書
其の指に庭つる力の柄振りと俳壮年武なる
く祖なる高を沢を俳の口號多年貧屋一蝸牛化做
蛞蝓得自由火宅最惶涙沫尽偶尋法雨入林丘今ふ一源
はにきなる法華経なる頭なるより

絶ゆるとなく何の法ぞ蓋しに進んで吟じ興発得たり
るとて泥鏡は遂に相前の所に咏出るを相和ぐ
の中に「雪是と出る仮の世の振る舞ひ」に振向ぐ
さきしこの所に「さくさくさくさくの食と寄せる酒高自
主の外志可元年二月四十三四年わすれ出
無代去ほ文人去年練代作曰く今茲如月末の日
月を叶菴に泊る相の江湖の事正
爽の絃を知る当に徇きて泪止めなければ
と出人のむかしを思ひに座のまに生ず大山侯に仕へ
勇猛の名を聞く一日の業二人伴ひ宿に若
父の家に思ひを通ず傍に髪おしきり墨染に引替ふ
る中略海の史邦に四月五雨亭に仮寓し先生に見
初めもしらず二月の中に病あり蓋し四月の火焼
の上に面白く吟じ合おくと出人鉄を先生の
ことに出修道に進む学ぶ人の上に立んず自
らをとのまゝ立下地の影きるを新も性
黄みなるあるを新しのまに國のうく吟一人あり七絃を弄
出ずして高ふるあり一先師海川の呼ぶ法のまの

ものと書集め侍るせるうち一大事や障の出くる事
稀月なと心(ほうかう)の方入侍りに陪雑のやう上達
さるうち侍りし此侍なりけるとと我こと(の)侍り
又強(しひて)うて痛所例に結(る)者ともに伽の費ものをまとめ
次日より我発後のものまる(し一まるうあ)後所加あ金ふまと
とのくまひりふを或は吹仮まう雑所打んと打ふの高所に
ものく書所速(或は吹)ふとて沈の君に当と侍なき
思ひに古母ましまし又は痛人(う)仮をすはやとむりまき
陽所をしるうを如くとを当ふに之やう唯一ぐく

まる業雑の下のうをはうれと心(ほう)一句のみを文草出
本うと國しまひるうを実に新ほ形にを加ほ誠を勧め
奥所拝り仏所求る此帳修しを八方時にを思ひ知侍
けを先仏迂紀の後を接ふ打平の方ふうを多のみあり
て義仲寺はう(の山に茅)庵所接ひふを拝るに孔子の
上に庵はるう此の時の時のおもけ者志ふやまふる或は一ふけうや家
うふに結をうとゆしつ訪まを志あり孤場者を迂仕く世上れ
侍ふ所結るを雨を仏蕉の平生丈草あるまるのもくれとふも望結の者所にを時時門自啓曲曲水
相逢なと井吟しを杖を接(落柿舎を叩く一句こんを侍
う都の杜鵑とも鳴るふふを彼山に出ひ覚りて脚下琵湖水

指頭花滝山と眺望殊に佳なり此山殊に高きの故
あり年小世にたるものの仮あり久しく重坂の翠を望
みて老を去る年の神世月一夜の男殊倚み茶菴に
あり一言記りや思つるは山のうへと中く今宵の影
誘にうつりを去りと去れを惜を斜なりて上弁まし富嶽
地に初き明月能を去ちけもは虚室欲琴閑是室
満山雷雨震寒更と奥しく出も哭し嶋しく初は分のよ
殊時うまを殊とうえしく書の窓も再び行えくり
今むかき名のこ残りまする九十年の哭ハ三年れ服ふ化

しを限を百年の無を生す惜てを拝名おかしく此一
日を多の来を仏事殊得るのみ一ふき名きく去
や三年の生をを

## 森川許六

森川許六は彦根士一名百仲字羽黒俳諧蕉
門と自称を称也を号て白雪井に四絶あり一に
草字藤祖と死二に揚揮豆絶絶三に雲花星と四
に紫芝園許六自賛を金雅の嫁るる夢由う文に新俳
人と成り敏まに長せり又画殊能を慧

也画たるゝ沙とふし俗語い数〻申ることなきと書う
を数〻まゝ舞せう「ゑ」に桐の若芽の形「今日の
まの切ほや帆ゑ紙「四五月の和波さ張やる紙「一等を死
性表ほや土用干「番組の写真彩新の鏡う形「桐杆う
ゆるや蓮の新法仏「初夏や涼しの人ん「嫁入う門
を見う新まき切蓮変の接樹を伐く肖
像新刻み見新大津う智用尼に舞るを文にいく
ら高ほ命やそこ白ゆ年れよ一月ゆ及五
は抑さるいまゝすきと云う仏像と及変い

世度蓮を手に姫もゝ白壱井の古寺を刻み
まひせい蓮ゝ大なる像刻み度望う芭蕉法と
う物語を叶ひうくは粉入切の方やし方
十月三日　京の後絵に添ふ蓮もゝ　許六

智用尼様

を恩遇う深き新高さるゝ新の切ひう形暁年庵
嫁を〻〻人に面さるゝ通道新四んと寿〇来
る人あふとと屏俳志きり通ことに許法一年金埴う
蓮ふいうゝ野面せんるの玉い人と屏俳新湯んや

と病篤に迫る頃に及ぶ和刻啓白を奏して臭
薬芸くしたり弟子ちかく寄り研妙なく妙つかく法
り合ぎる時に病あり妻に思いるに隠しを一夜
弟子に夜ふかくを愧きを陸雅に於ての大丈夫
ありりと時人語り合るとを正徳四年に死を終焉り
偈に一時に破屎糞壺茨々臭氣供梵天一下を
死ぬるとと思しに上手と死〇を屎上手なる事子
終身已もう少し自賛しく化ば菊物と思り奈平
生業の狂中へ下さきて入るの我のみなりと言ふ

訪壱坊を膚撲ます月迦うさまを仏家の一芸なと称
ぎ奉

## 東京坊支考

支考ものを屠別りて人ものを禅師に入り禅義をと之り
しを弱冠の時分の時元禄也春三月野猪牡丹花下尽と
之る偈を作り宗門に高僧に未参無未だとる事都
或寺の大會に碧巖の講を八ケ条の荊棘を難問す
衣に法眷を少を好ミ遂に禅機を抜き出すを不賞て
帰山因に対ずるが如くしるが如く陸雅に親ミ交る時に

源義家の女なれ惜み纒綿すゝめ奉るに入道功ありて
ゆるしをいふ見龍と八騎に陪従の名白狗遠こゝを仮に
設るおのゝ〳〵その為なるべし三類の図に志る或ハ菓志人
の称あり坊号ハ東華西華と唱る四方一道遠ハ道の
僧あり世に生とき八盤ゐと唱ひ家に生とき八狗子老人
といふ支考と又ハ蕉名あり玄学二教に渉り老に
文章自負す著書十論古今抄等ハ確
論あり世数多に到るべし亦与許六曾徳改耳行校
し給ひかゝれ梅の花一種仏や日出度るに書ほひり

一唯るの影ひゝ西一鶏五百一牛呵る声に明方夕れ一恵
ゆるに書ハ世に網代ゝ書の山子修形成ず修律なり
て居ゝ旨ゝ張衣鉢を解の石敷る時一蓮の葉に小便せ
ば仏舎利の如中に肉食あとの枝縦も甚多成或法師い
ま〳〵僧隠義せば事世ゝ牛とあ〳〵しと之るに答ゝ
一牛にる合ゝや影孫夕ゝ一年庵の巴蕉と行響へ
はる思ゝ書名の源ゝ多（ゝ多ゝ）りな陪ゝ書ハ夷を遠山
ゝいまゝ額ゝ志ゝ弱るの京津美ハ童敲茶に為ゝ雪
雀ゝ叫ゝるに思ゝ洋ゝ海ゝ書ゝ多ゝ

繩のごとく及ぶなき境遇なり拍板の背中を叩いて一句吟じ
と面白き顔して曰く古人を京に遊ぶ唖者と云り新十郎なる
るものあるを知らず拍板の製造する所にあるまた今東何方へ
者なるがそこの巨妓に張ると実に通ずるの徳中
八別なりと拍子を感じて風月を晩年陽春に
一時に通じ大年代拍板時に青年を春に春
接世連掃こと清書一流を唱ふるを見まして光を徒ふ
らしたり

## 廣工北枝

小枝は金城の廣工ふ牧童の声なり蕉翁その
紙を感じ小京に送せと移せ多に何時の
秋月一出の幕を拍板一事を秋に
ことなり以来一外を風の暮時の
作者を京に入る初久を友拍板
廣工風蘭北枝嘗に日毎に流
籍の姫を拍板すこと
絶えざる中業の比

枝葉の下に横臥せるに下ぜしと
酒のよいなんと合点して見ると芳しき枝いきて見
なくは一杯のみたしと柳枝軒が大笑して称ふ酒
なければとなまじ枝の口号「某酒を我と
命じて火うち車或は枝の家に郷酒あり三更の比
偷児入る有り知る人あり訪と告く枝あるべく何も
燈燭ふきて心事と戯れ乗りて少事在に活人
みな野かしく言葉成器さと時ふ「世の酒しに業蓋
ちんくと笑ひ枝あるべき「盃人の目に掛ら

ずして長年間金堆積共
悪あるべく唐合なるべき暗那となる枝の家を累次
ヤ支ヒち多く訪ふる美人に「徒に少事さしたる
花を菱しとて自若あるべさは奥在る河可
落ふきて能弁なる紳士なりと時人感ずるを後ふ
多くは次第に昔に従ふ人先に来りて家情を
とく「活ともに枝とつるとすみとなる湖の中に一句
麋生枝いまく「活ともに枝と号とすみとなり
そこのあるべきなく動多事かと潜稽古意

[illegible]

[illegible]

一書に曰く、[illegible]牧童、[illegible]久しきを以て[illegible]小屋

の屋根に枝又は[illegible]に掛けて[illegible]仙一枝椎の枝に[illegible]

を水鏡[illegible]小枝一昌[illegible]と[illegible]の茶の[illegible]往昔一坂

翁一名の人の[illegible]夫者[illegible]或年門人往昔[illegible]

庵に在り日[illegible]なる枝おやみとなく

[illegible]しき湯[illegible]の世[illegible]当[illegible]角[illegible]中

[illegible]の為[illegible]に[illegible]

昔の命[illegible]と[illegible]強[illegible]に入て[illegible]

叫き往昔[illegible]我[illegible]

[illegible]

と初め[illegible]

[illegible]

## 鯉屋杉谷

鯉屋杉谷[illegible]の人[illegible]の[illegible]

[illegible]と生涯[illegible]の憂[illegible]

逝[illegible]号を一拙[illegible]

と接初る歟や秋の比「蕉や」を日々の苔の出来
「出来」と又掬ひ〳〵国々の郡郷に蕉風を移す
る出来ぬか我が世に出ぬ一年前に送別の句に紅
とふく世の吹捨て哀れ素堂去る秋の行く秋
の名残や作者も去る人も只松尾の淋しき人
とゝり或書に沙の弱後たの人支考と称交するよ
況て大なる妄誕なり牧童の巣刈菌集に杉風
支考の文書あり支考にいたる
墨子も早世に成り門に入ると称也

此しく我が厨に住りに始て口を入れ一夜
年の中に出来る句成り始めて皆悉くは
外に有者なりし
改のすゝめを遠者に人皆笑の中
享保十八年八十餘年にて死せり

野坡

摘家野坡は蕉の前列の人門の門に遊び後浪花に
住て樗木社と号す蕉門の徒に附合の作成ること
出へと蕉門に親しく出来ぬ書あり一日数句

我の四もは物まうの所に長行ふ祝の為に事る出業の志
「さき掃除しに山業に出にき事よ」と汝の垣の東の方
初たくもし或は盗人の家に忍入り城お射くいち
我一和の弥一あり昨業一行早の五り今朝はもり
柴打焚くに力よく実法まと盗ふつきまの彼
見うち弾つ机上に茅庵の名出我逃出四くと猶考
「我庵の掃き家一掃り先と切多我又つまの分のまの者
と四方城外にのまり業ふ東城は今日前の男釈を
力作なるべきやと城まの「垣潜る蓋なるまふく

方の隙と盗人に感じ心ときりまくと放まる
年叶の此一主後失仰の業為庵を立法に祝し
自ら言法の業と称せり三年ある記録
我智禅人
我智禅人と尾陽護城に住き意の志戸ある事
「夕夏一柿の木の熟りすきる
業柴ふ所「業ある植野ある特西部「裸の稿する迎
しる家を立ふ所一年沼戸に主角ふ久戸と
書成業しに禅人ふ道ふ久に「教ときの仏為さよ筆

霊の恙と云るに「梅はもと陰と春まちすけーの恙と春ー
うと山人の梅ありも及ぶさ所より沙弥と呼び歌せ所
去し所の梅樹に然し梅樹あるに何しら蒙古の志を
受ぶ事しや若き世あと山人きるも春ー所その
梅ひかさ所より所梅合ー梅の梅樹ふた事に書
すもも何とおく嫌く梅樹梅ー「歌まし思
切る時猫の意早ちかいちり梅と山梅梅よ
みしん梅の撰集に山ら梅加入ひしとそ色ち春
の梅ちなるとみ玉の危に危なきとうと梅さし

さ山女猫所叩く事移所知ることそ山人の梅所ある
しや春歌しし梅春の夫秀先梅の春恵潜智
梅梅ちう意ち所梅「ち紀牡撰の書多くやしく
古武所廣ー世人所歌けは見人に想ち所猫蛇とし
書所著しし洋に生梅所弁せ実に我道に梅切
吉日清潔の士ロち山曲の事ち梅人

曲翠 或云曲水

河州稽石の士にしし馬指菓と号ち知さち刑慈門
に拙く主夫手と移せちは「高入く春のう蓉も山茶

うれ「思ふことなきにしも蟾蜍「馬のほ声を
杜甫の詩の或年深川芭蕉庵の詠歌「草
の小稲あをみ渡やさ波の国知る人我ぞなきの
君寵深く宮中多くは出でず昔めかしく計つまて
和歌「すゝ一入も雪ふる寒きに自然と書破れ
ふるく羅繋れ名に負ふ貞操の志をあらはし
まみの絵父幼稚老人は閑寂風雅みゝの慈
義う方の絵にはこの多

雅称坊

清別の人蓮の花の如く泥沼の中と咲く生涯潔白義
堂に住る和漢に通ず俳諧の名あり一水亭むふ
は号「ほくいつい」也亭茅舎の名を亭「表
山の陰ふるまさに小寺の水「時の事を述べ時ふり
「名と利を二の二の月日梅の花香しきあ
ふれあらんとの

白空

加別和歌に関雅に柳陰と号を常に雅称あ

りて慧義成坊とゝるゝ本願寺義も主張志賀國し
て以くしみ深く義仲なる人は此の為に第好成の画賛
し一枝の梅咲曙毒となるうりさる強さに成初
義さの柳陽動に強毒の意成強くいと暗くうら
し一義る柳なるしも掛を強く強く主なる
一年京の日等一茶咲くし京の横になりにて一枝角と
庵しうせよ月の雨又成一枝う事ゆ入ほ里さ
牛の角とゝほ今とあり

秋うゆ

金城に名るき陽士なる一流つきを流つき来
このう世の民なとゝほ毒海もあり或は此る湖南の
初須庵に対し遠に沙義の一枝名ハ此のハさ成紀を礼
三人と来こ来の伝毒取詩さしう場と遠世の方ハとと
毒事迅速のうとといとぬんとらに物強ま一蕎まん
天遠う一風うて死は来を天とと蛙の声と一句う遠
強に主ゆ成は貴くいほ民へさ主に清毒高新金し
死隆に毒掛ふと多く掛をるハ天るめも美しヒ中しる
主絵馬さ西月になるうう明友事来詩に年う強相

[illegible]者の如し 時日我暦紙まとめて見る一四月
四日なり山世我去に[illegible]しに口すさむと[illegible]
もいく息絶えぬ事[illegible]事[illegible]なるきしかるも[illegible]生自己
我二[illegible]とする志にあらざると國[illegible]なるべし「稲つむと
又世く[illegible]の[illegible]の如く[illegible]
当とうれ

事[illegible]金[illegible]村の[illegible]に[illegible]
[illegible]事[illegible]諸[illegible]
[illegible]上に[illegible]人の[illegible]

遂に[illegible]「[illegible]
[illegible]の[illegible]と[illegible]
人といふ[illegible]

修源記

[illegible]一地[illegible]の連[illegible]城中井[illegible]
[illegible]一年[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]集[illegible]
[illegible]

一生の内数集めて名付て「ゑ入」と号する事や雄山「半」の時を生じ其時の「書」を以て描出の小口元禄十六年壮年にして紀

僧千那

河西豊田村福の十二世にして法名成明武上人と云

[illegible]蒲釜坊と号す慈心の地紫と称す

「釜坊」と云ふ[illegible]の[illegible]の形や梅

柳「高雅」に見る[illegible]享保八年に歿

年七十四三界寺

## 小川破笠

小川平右衛門江戸の人性多能ふして画と細工に長ず事

絵を京狩野に学び後に其上に出る

「図」は此の人に「書」を学ぶと雖人

「て」釈尊に踏まれ亡命する事数度此中

に伝はる入り者多し

京桂に破笠の彫物の事

東陽一枝堂と食物と磯辺の「色」食物を初

[illegible]梅山[illegible]と称し[illegible]

後志ありて津保へ居されし金銀をなしのぼりて定家卿
年八十餘歳にして死せり

路通

何ものゝ子の人なるを知るものもなかりしに 其通し得てもの
人の下に躬をかゞめし乞食路通は乞食の時通の傍に
有いはれ 呂後の頃に及ぶ初めより好みし俳諧にて
去ければ一首の発句を扇に書て翁に呈せしを青と称し
ゐましく「露と見え路通せし旅の達なるを以て
翁の極ありまし 翁 歎して曰く 我いまし君家に法之

し時路の東北の方松嶋ゆきし輔山の麓に住居らしに
今出俳諧のみしかきしに越して生涯の楽みとせし油揃有
後くちまへしと此中の情ありく去りり路通の名は
まだ知らへられ「山桜の辛くはしく浮世ごみ一いわたと人
にいはれし年の暮 湖南義仲寺に籠て路通つ「月
にあらしや浮まゝと水の秋 後志に達するに難く
湖中の中しおり翁より猪の曲水へ書たるの書に
路通ハ古拙にて還俗いたしたるよしにて候
さし三年以前より是へ集る真に申す静くに

[illegible]

平生の人のくるはずの者なるに何の
[illegible]
[illegible]
しの生涯をすごす猶里[illegible]

こりすはは　[illegible]

## 猶予

俳諧別部に猶予と云ふ小河[illegible]

## 曲[illegible]

同藩友田氏（[illegible]）いふ[illegible]俳諧[illegible]
[illegible]
「[illegible]」[illegible]
[illegible]

## 智[illegible]

江戸藩[illegible]の人乙[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

「[illegible]」と命ぜられ、[illegible]の[illegible]に[illegible]「[illegible]」と[illegible]に[illegible]梅花[illegible]の[illegible]を[illegible]て「[illegible]」[illegible]の[illegible]「[illegible]」[illegible]の[illegible]

## 源義

[illegible]山[illegible]に在[illegible]神[illegible][illegible]に[illegible]乙由と[illegible][illegible]と[illegible]神[illegible]と[illegible]「[illegible]」[illegible]に[illegible]の[illegible]「[illegible]」[illegible]に[illegible]の[illegible]梅[illegible]に[illegible]梅[illegible]に[illegible]梅[illegible]の[illegible]「[illegible]」[illegible]の[illegible]「[illegible]」[illegible]

の[illegible]に[illegible][illegible]と[illegible]と[illegible]と[illegible]と[illegible]と[illegible]の[illegible]の[illegible]「[illegible]」[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]梅[illegible]の[illegible]梅[illegible]に[illegible]梅[illegible]の[illegible]「[illegible]」[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]「[illegible]」[illegible]の[illegible]の[illegible]と[illegible]の[illegible]の[illegible]と[illegible]の[illegible]

息を絶えて一寸に成る兆しとして腐敗を患へ死せ
りとす高中の水に「かまくら」人を取るとて網打
ばかりにかくの仕合と云ふ飛騨高山に話ふ伝
第五

紙別紙の産物高山に於て蒸に入れ一時に出
あり「ほうの」と爲す事「果」の明離しあ
新穂山「ほうの」産出の法に「ほうの」を採売る事「ほうの」
産物の市の毎日梅雨の細雨に当る程
毎年紙幣の図出あるに四月あまは先づ

紙と賣る「市場」なり紙と云ふ物の為或る時人
山中あり沙の高に遠い引かしめると以ほうの大事
為に為に義絵集に義絵ほうの場と「おうみ」紙
ある汗衫と呼ぶ云ふ志の程考ふ
原因宮古
利別郡山の重任高り義絵博東義絵「おうみ」
に通ひ或る人に平り梅の影いと長多せと
沙の場の高に出る遊山「先」の多梅の名
の梅と云ふ産に「後」「慧」に入る沙

殊勝なと云追慕紀にくはしく翁の発句を抄とる
と前書して「大空世に高せは梅の花清く里深川へ参て
「あはれさき竹の影也庵の跡暮へ請て「百年の跡しく
桃の家集の歌或る「鳴千るむきまの庵室の艶か
「一むかし数て様に落葉か歌或年の春秋「身に入る
梅咲く日の逢坂の歌又武蔵清少納言いつに書落さ
れたる人昔しなつかしき物と前書して「虫干や締
の跡と書母の墓一句に五十路余年見まもるへ「薄くの翁の
花さんぬとをとはなし 誹儒紀の三巻を田畑へ「前の那

に出るの草菴く酒井し又同文の什器し抄か中千「梅
の実山のあかまなの末清へ文集の墨を志ろく人男し
出雲の蝶「四季の京月に見る集の跡のきし「梅のみか
光不るまをを誹の面なの達代自由なりをし太祖なり
安永十年刊

## 生碕菜子

加州金城の士にして家世と号す蓮翁と友としよし
紫君庵と号まて「岩永ん日々の梅の歌「春雨干
三日月かけ尓梅この那世にしかみ那蕉へ十哲の和かへ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

## 知足一ふく

[illegible]の人義茂と申し[illegible]

[illegible]章と号し一ふく[illegible]

[illegible]に住む福[illegible]

[illegible]の家[illegible]又[illegible]

知足[illegible]

[illegible]

[illegible]「[illegible]」[illegible]

[illegible]「[illegible]」[illegible]

[illegible]

## 山口素堂

江戸の人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

すきなる人の日の十三夜「月に吉き来山うらさき初月の高嶺三年八月七十
五年に〳〵弦やれ」